

外部の力でキャリア教育

中退や進路未決定者減に取り組み

都内の高校進学率が約98%となる中、中退や進路未決定で卒業する者も増加している。都ではそのうち若者の支援に乗り出すとともに、地域や社会の教育力を活用したキャリア教育の充実などで未然防止にも力を注いでいる。都立青井高校は今年度までの3年間、教育委員会重点支援校に指定され、外部と連携しながら体験的キャリア教育を推進してきた。また、2016年度に全面実施される「人間としての在り方生き方に関する新教科」の先行実施校でもある。生徒の夢を応援したいと取り組む同校を訪ねた。



育て上げネットが各クラスで金銭基礎教育を実施

金銭教育で進路を考える

青井高校で2月18日、1学年7クラスで金銭基礎教育が行われた。新教科「キャリアデザイン」の一環で、認定NPO法人育て上げネットが担

当。「この授業には正解も不正解もない。盛り上がっていきましょう」と講師。「一人暮らしに興味があつた」「節約できてもゼロには出来ない」、通信費など「ゼロにすると出来ないことが出てくる」、国保、年金、所得住民税は「日本に住んでいる限り払わなくてはならない。給料の2割になり、実際に使えるのは16万円」と話した。

次に「稼ぎ方・働き方カード」を引かせ、フリーター、正社員、派遣社員

の3グループに分けた。さらに「月収カード」を引くと、「100万円」「15万円」「やばい」などの声が上がった。一挙に盛り上がった。そこで、働く時間には制約があることに気付かせた。

正社員と派遣、フリーターそれぞれに給与面や希望の仕事に就けるか、有期雇用など一長一短があり、「どの働き方が良い」ということはない」と講師。「遊ぶ時間を減らして働きたい」などの意見に「将来、暮らし方が変わっても同じことを考えるかな」と語った。

「暮らし方カード」には、▽年齢▽住居▽結婚▽子供——のそれぞれで30歳や40歳、賃貸マンションやマイホーム、既婚や未婚、子供の有無などが書かれ、「カードを引いて、いろいろ考えたと思う」と講師。①生きていくにはお金が必要②貯金も大切③進路は慎重に選ぶ——とまとめた。

ワークシート記入後、班の代表が「進級・卒業できるようにしたい」「良い仕事に就けるよう勉強したい」「資格を取りたい」などと発表。担任は「目指していることが低めだよ。もっと何々するとか、具体的に何をどう勉強するかを考えて」と発破をかけていた。

生徒の心に響く言葉

この日は、重点支援指定校の「成果発表会」も開催。赴任して5年目の藤田正美校長は「本校に来た当時は240人が入学し、80人が途中で退学、残った生徒も3分の1くらいが進路未決定で、1

30人くらいが生活保護予備軍と言える状態だった。社会貢献できる人材を育成するという本校の使命とは、全く逆の状態だった」と話す。

「進路未決定者の減少と中途退学者の未然防止」「職業的自立意識の醸成と進路実現」を掲げて支援校に応募。発表会には教員も参加し、この間の成果を共有した。

東部学校経営支援センターの小塩明伸学校経営支援担当課長は、キャリア教育に取り組む中で生徒が変わってきていると、今後とも地元足立区や都教委と連携した取り組みに協力していくとあいさつした。

東京都高等学校進路指導協議会事務局長も務める浦部ひとみ幹事教諭は「進路指導部主任として、▽キャリア教育▽中退の未然防止と進路未決定生徒への対応——を発表した。13年度から都教委の「企業・NPOと連携した都立高校生の『社会的・職業的自立』支援教育プログラム」実施校となっており、今年度は「人間としての在り方生き方に関する新教科」先行実施校として、様々な取り組みを行ってきたと話す。

「1年生での退学割合が非常に高いので、入学したばかりの生徒への取り組みが重要」と、新たに3年間を通じた「進路カード」を作成し、指導内容を集約して継続的な指導に生かす。また、大

学生との触れ合いやトークの場を設けることで、視野が広がると話した。金銭基礎教育の他、コミュニケーション力を高める「ドラマケーションプログラム」を4回実施。「伝えることの大切さなどを感じ取っている」。土曜補習講座も開講し、当初1年生240人のうち130人が希望。勉強に苦手意識がある生徒たちなので、「短期的なこと」と言う。

「進路多様校」へ理解を示す企業もあり、IBMの若手社員は進路多様校出身とか高校卒で大活躍している中堅社員がいるなどと話してくれる。「経済的に厳しいので就職だと思つ」と話に来た生徒に、進学の可能性をアドバイスしてくれ、奨学金等を利用して進学が決まった例も。「それまで教員も担任も働き掛けているが響かない。外の人が言つと響くんです」

「外の人が学校に入り、一緒に生徒を育てていくというイメージはつかみにくいと思うが、教員だけが生徒の人生を抱えるのでなく、いろいろな人が関わって社会全体で若者を育てていくのが今後の姿になる」と語った。

やり直しが利く仕組みを地域教育支援部生涯学習課の梶野光信計画担当係長は「在校中に生徒の進路決定を促したい」といふ藤田校長の要望に応える形で、生徒の実情に応じた企業やNPOの教育プログラムを提供してきたが、その多くが超える外部支援者が関わってきたが、その多くが『先生からもっと意見をいただきたいかった』と感想を残している。今後は先生方が学校側の狙いや思いを支援者に伝えることで、より良い教育活動を作っていくつもり」と述べた。また、「青井高校では既に取り組んでいるところだが、今回の都長期ビジョンでも①中途退学者の未然防止と進

路支援②就業意識の向上③お金に関する幅広い学習を通して生きる力を育む——がうたわれ、なかなか自分の将来を決められない生徒たちをしっかりと力バリーしていくことが今後より重要となる」と指摘。「やり直しが利く仕組みで高校教育を考えたい」と話した。

校長は「組織的なキャリア教育を行っているのは現2年生からで、来年度に取り組みの成果が問われると考えているが、今年度は進路決定率85%の目標が達成されそうだが、生徒たちの姿勢に変化をもたらしていることには確かだ、学校が一つに取っかかり、学校の生徒をとり巻く範囲はとて狭く、一人親も多い。自分でしっかり考えて、今後の方針を立てることが難しい。頼れる大人が少ない環境で、こんな大人がいるんだと知ることが大きい」と話した。